



オランダ郊外の農村風景（本文中に関連記事があります）

目次／contents

- 新年のあいさつ…………… 2**
- 人・まち・地域…………… 5**
 - ・ 関係性を再構築する装置／森岡武
 - ・ 仕事の足跡をたどる「北九州市・旧古河鉱業若松ビルを訪ねて」
／尾関利勝
 - ・ 環境政策もラジカルな合理主義の国オランダ／畑中直樹
- きんきょう…………… 10**
 - ・ めざすは城内地区の活性化「尼崎城内フォーラム」が
開催されました／岡本壮平
 - ・ 文化財となった戦前長屋の体験研修／馬場正哲
- うまいもの通信…………… 13**
 - ・ 旅館と農園の「コラボで卵」～新たな「能登の味覚」が登場！
／高野隆嗣
- メディア・ウォッチ…………… 14**
 - ・ 「プレゼンテーションの極意」／坂井信行
 - ・ 「カーテンコール」「ALWAYS 三丁目の夕日」「らくた銀座」
／中塚一
- まちかど…………… 16**
 - ・ 歴史的な町並みが残る「坂本」を訪ねて／木下博貴



新年のあいさつ

新年あけまして
おめでと〜ございませす

新年のご挨拶にかえて

取締役会長／三輪 泰司

寒風にもめげず、菜の花の若葉が懸命に育っています。植物の若芽も、動物の子と同じで可愛いです。春は菜の花、夏は向日葵。冬は12月初めまで、来秋のためにコスモスの種を採っていました。彼等は1年の間に幼児から少年へ育ち、青年になり花を咲かせ、やがて枯れてゆく一生を見せてくれます。

昨年夏、家族の一員・犬のブンが逝きましたので、多分、新年のご挨拶は遠慮しなければならないのでしょうか。樺太犬の血をひき、たいそう力が強かった彼の仔犬の時から15年の生涯を見てきました。

彼等とつきあって、人間がしてやれること、人間にしかできないことを考えさせてくれます。彼等も仲間があり次世代を伝えますが、人間の特徴は個人でも組織でも、志をもつこと、他をおもいやること、みんなのために奉仕することでしょう。

今年はアルパック創業39年目です。40周年を目前に、組織と個人の関係を考えます。経営組織としての志は、最大ではなく“最強”を目指すこと。経営としては、創業以来1度も赤字をだしていません。ご指導ご支援のおかげです。経営者がやれることは、最高の経営資源＝人材を育て、活かすことです。

菜の花の種は、10月の日照がある時期に播きます。まず土壌を整え、水をやる。お母さんの懐とおっぱいのようなもの。次は離乳食で、肥やしをちょっと。あとは自分の力ですくすくと大きくなります。

今、地域の課題は山積。経営にとって日照条件はよくないですが、土壌条件を整え、水と肥やしをやるのは、経営者ができること。個人が志を高め、強くになれる仕組みを整え、組織を最強にします。

人間ですから土から離れて行ってもよい、他の国から来てもよいし、連合もできます。行動基準は志。闘う組織と個人づくりへ、今年のテーマです。

地域の連携と協働で自律的再生の実践の一步を

代表取締役社長・京都事務所長／金井 萬造

あけましておめでとうございます。昨年同様、本年もよろしくご指導、ご支援をお願いいたします。

今日、地方分権、自立に向けた財政改革が進展し、新たな仕組みの中で各種の事業が進もうとしています。それに伴い、コンサルタントも新たな意識改革のもとに、地域や企業、住民がより豊かに幸せになるよう一層の努力と貢献が必要となってきています。

さらにこれまでの、産業経済の振興、生活文化、環境の取り組みには、長期にわたる継続した努力が大切と考えています。時代の大きな流れに対し、真正面から地域の課題に向き合って、個人と組織の力が全開するよう心掛けていきますのでよろしくお願い申し上げます。

昨年、アルパックでは多くの取り組みがありました。大学と行政が連携した出前講座の展開、地域アドバイザーとしての地域の経営・再生の取り組み、地方シンクタンク協議会の20周年記念事業、国際草の根交流の新しい企画への参加、中心市街地活性化の取り組み、観光分野でのビジョンづくりなどで、全力で実践してきました。

私も、還暦元年から2年を経過し孫と同じ年齢です。孫の成長と競争するつもりで日々、努力を重ねていくつもりです。

本年は、コンサルタント、シンクタンクの職能が実践的に発揮されるよう個人の資質の向上とネットワークと連携交流や組織運営に力を注ぎ、委託者や地域の方々のために十分な役割を果たせるよう努力したいと願っています。地域の経済の活性化と環境、自然などの組合せによるトータルの豊かさの実現に向けてがんばっていきたくと思っています。

これまで考えてきた、連携と協働の実践による地域の自律的再生はますます重要な課題となってきています。時代が大きく変化する中で地域固有の特性が関係者の力の結集により大きく花開くよう最大限の努力をしてみたいと思いますのでアルパックをよろしくようお願い申し上げます。

本年もどうぞよろしく
お願いいたします

地域経営と企業経営は、創造と革新をキーワードに

大阪事務所長／杉原 五郎

21世紀の6年目を迎え、時代がめまぐるしく展開していくのを実感します。

関西文化学術研究都市(けいはんな)とは、奥田懇談会による提言以来、27年のおつきあいになります。サード・ステージに向けて、イノベーションクラスターの構想づくり、関西知識回廊実現ための交流・連携の仕組みづくり、生活者とまちづくりの視点から生活支援型ロボット開発のあり方検討などに取り組んでいます。

大阪湾ベイエリアでは、大阪湾の環境再生をめざして、市民・NPO・大学・行政等のプラットフォームとして、「大阪湾見守りネット」を関係者と協働して設立しました。また、釣り人参加による大阪湾環境モニター制度の創設に向けた取り組みを進めています。

このほか大阪事務所では、廃棄物に係る調査・計画づくり、21世紀の森づくり、稀少生物の保全、コミュニティバスの運営と経営、合併市町村の行政運営支援、景観と緑の計画づくり、伝統的建築物保存地区の計画、新しいタイプの小中学校や楽農センターの建築、市民まちづくり塾の運営と担い手養成、など多岐にわたる仕事を進めています。

国や自治体をめぐる厳しい状況が続く中で、人々の豊かな暮らしと地域の自立的な発展をめざして、多くの関係主体との協働の輪をさらに広げていきたいと思いをします。

これからのまちや地域そして企業の経営に求められるものは、何でしょうか。「創造(Creativity)」と「革新(Innovation)」をキーワードに、閉塞感のある現状を打開していきたいと思いをします。皆様のご支援を引き続きよろしくお願いをします。

変化の時期だからこそ性善説を通していきたい

名古屋事務所長／尾関 利勝

新年、おめでとうございます。旧年中、皆様より頂戴したご厚情に紙面を借りて御礼を申し上げます。

昨年名古屋地域はほぼ、空港と博覧会、好調なトヨタ、そして女子レスリング金メダル組とフィギュア・スケート有望選手群の話題で持ちきりでした。

名古屋の有望スポーツと言えば、他にマラソン、バスケット、体操、少し前までは水泳、ゴルフと女子選手の活躍に目を見張るものがあります。昨年創立100周年を迎えた中京女子大学(谷岡郁子学長)では、日本初の女子硬式野球チームが学連から公認され、今年から紅一点でリーグ戦に登場します。全国中等学校野球大会(甲子園の前身)第一回が開催された名古屋(八事山本球場)ならではの出来事です。ちなみに最初の巨人・阪神戦もこの球場でした。博覧会の話題の一つに名古屋嬢のことをこのレターに書きましたが、その背景として女子スポーツに代表される女性の活躍が名古屋地域の未来を指し示す大きな特徴なのだと改めて実感しています。

先の世界大戦終戦から60年を過ぎ、明治維新以後最も長く平和な時代が続いています。その中で今、行革や地方分権、自律と協働など、近代130年のシステムと価値観が激変しつつあると実感します。流れの方向を見失いがちな渦巻きの中で、バブルの失敗を繰り返さないと思ってもITバブル、証券化と不動産バブル、そこに悪徳先物取引、構造計算偽造組織犯罪を引き起こしたホテル・マンションバブル、人間の欲望は何処までも尽きないようです。

こういう時期だからこそ、水の流れと泡とを区別しうるモラル感を堅持し、そして何よりも人の幸せを願う性善説に立って、地域と時代の流れとともに生きていきたいと願ってやみません。



新年のあいさつ

新年あけまして
おめでとうございます

新0歳から歳を数えていこうかと思ひます

東京事務所長／小林 佑造

戦後60年、年末になってまちや建築に関わっている私たちにとって何ともやるせない、殺伐とした事が起こってしまいました。

人間は10年あれば、何か一つのことを仕上げる事ができると思ひますが、意識が守勢になってしまうと、人間ドンドン老け込んでしまつて、あらぬ方向に行ってしまうものなのでしょう。

私の好きな木彫作家である、平櫛田中翁^{ひらぐしでんちゆう}は107歳でお亡くなりになりましたが、100歳の時20年分の制作材料として楠木の太木を買い、今はその一部が小平市にある田中館の玄関先に置かれています。見る毎に新0歳の気持ちを感じさせてもらっています。

田中翁は白寿だから「いいや」と言うのではなく「これから新しい何かを自分から始める」という意識から、次のフレッシュな気持ちに切り替えていったのではないのでしょうか。

私たちの携わっている仕事も10年仕事となるものもたくさんあります。

個人参加している団地の建て替えも5年経ち、私たち委員も権利者の方達も少々イライラしてきています。今年は「建替え推進協議」を行うことから一山越すこととなりますが「誰のために」「何を求めて」が空回りしないよう、新0歳の気持ちを持って取り組めばと思ひます。



直径1.9m 重量5.5トン笠をかぶった楠の太木

九州に根を張り、業務展開を

九州事務所長・(株)よかネット代表取締役社長

／山田 龍雄

あけましておめでとうございます。

昨年3月20日の福岡県玄界沖地震で事務所の書棚はほとんど倒れてしまい、崩れた古いラック扉の中には交換部品がなく、そのままの状態となっているものもあります。少々地震の傷跡も残っている事務所において、今年度も総勢8名で九州のまちづくりや都市計画等の仕事に邁進していきたいと思ひます。

毎年、営業環境は厳しさを増していますが、昨年、九州事務所((株)よかネット)の業務で少し特徴的なものをあげますと①玄海沖の人工島への中国企業誘致の可能性と仕組みづくり、②熊本県の工業技術センターやテクノ財団などの製造業に係わる支援施設の統廃合のあり方(運営、施設計画等)の検討、③都市計画外の全域都市計画編入に伴う行政区毎のまちづくり委員会の運営の支援業務、④行政と企業との協働による子育て支援のあり方研究、⑤街なか居住や郊外の計画的市街地での居住支援のあり方など、比較的幅広い業務をさせていただきました。

新しい仕事は、担当者の知識に追いつくための情報収集と勉強など大変な面もありますが、やりがいのあるものです。コンサルタント業界の仕事ニーズは、地域や暮らしの問題や矛盾がある限り尽きませんが、日々、新しいことに挑戦していかなければならないと思ひます。また、これから仕事の幅を広げていくためには、行政一辺倒ではなく、地元のNPOや地域の活動団体などと一緒に地道な取り組みも行っていかなければと思ひます。今年も、九州に根を張って頑張っていきたいと思ひますので、よろしくお願ひします。



ひと・まち・地域

関係性を再構築する装置
丹波市第1号登録有形文化財
大阪事務所／森岡 武

残したい・・・

丹波市青垣町東芦田江古端。解体寸前の茅葺き民家にあかりが灯ったのは平成15年11月1日、農村環境計画策定中の出来事でした。集落自慢の民家の最後を、あかりで感謝しようという有志（江古花園）の粋なはからいでした。

残そう・・・

暗闇に浮かびあがったその堂々たる姿は、圧巻でした。

前面の田んぼが水鏡となりさらにその深みをましました。このあかりは、里山、民家、石垣、畦、田んぼ等が一体となった農村景観のみならず、心の風景をも蘇らせました。

ここは代々、庄屋さんであり、集落の文化サロンだったそうです。庄屋さんは文化人であり続け、集う人々は「英会話を習った」、「ダンスを踊った」、「音楽鑑賞をした」など、走馬燈のように民家に埋め込まれた記憶が駆けめぐり世代を超えた“会話”が始まりました。久々の賑わいを前に「ご先祖様が喜んでいる」、皆の声が所有者の心に届いた瞬間でした。

残った・・・

築180年の蘆田家住宅。江戸後期に建てられた2階建ての茅葺き民家（延べ面積約230㎡）です。2階建ての茅葺き民家は、但馬地域で数例、丹波地域以南では皆無に等しいという珍しい構造で、文化財的にも価値が高いことが証明されました。国の登録有形文化財として証となるプレートを待つばかりです。

関係性を再構築する装置・・・

この民家、ただ単に残ったのではありません。登録文化財申請の際、江古花園の民家保存運動も評価の対象になったと聞きます。さらに、所有者が申請にかかる費用を捻出し、兵庫県ヘリテージマネージャーが迅速かつ詳細な調査を進めるなど、兵庫県、丹波市、地元集落と言った多様な主体の参画と協働のもと実現したものです。

人が集い、会話し、新しいものが創造される。まさしくこの民家はそういった運命を背負った空間であり、江古花園のあかりによって、個人の所有を越えて再び社会性を帯びた空間（関係性を再構築する装置）に戻ったのです。

残すという創造性・・・

これから何を創りだすか？古いモノを残すといった発想だけからは何も生まれないと私は考えます。個人の力には自ずと限界があります。また、市場経済原理は非常なものです。

個人では買えない（変えない）もの、お金で解決できないもの・・・今、社会は、こういったなんとなく懐かしい感覚を躍起になって探しているのではないのでしょうか？

「ひと」もうけ

すごく感覚的ですが、経済価値は今、発想力や創造力など、数値化できないものに向かっているのではないのでしょうか。「関係性」を構築する「会話する力」であったり「創造する力」であったり。この民家が息続けるには、「ひと」もうけ（ひともの・かねが循環する古くて新しい社会システムの構築）が必要不可欠です。

風土と関わり、人と関わり続けてきた民家が集落に残った・・・必然か？偶然か？

偶然にしないよう知恵をしぼります！



写真上：あかり展 写真下：蘆田家住宅



ひと・まち・地域

仕事の足跡をたどる
北九州市・旧古河鋳業若松ビルを訪ねて
名古屋事務所／尾関 利勝

指定管理者事例調査で久々に北九州市を訪問

12月1日、指定管理者制度の事例ヒアリングのため、久々に北九州市役所を訪問。その後、地元まちづくり組織が指定管理者になり、公開・運営されている旧古河鋳業若松ビルを訪ねた。

北九州市から都市景観形成調査依頼のため、わざわざ名古屋まで職員の方が来られたのは平成3年のこと。以来、アルパック九州と名古屋の協働で2カ年の調査を実施、平成5年3月に北九州市都市景観形成基本計画のまとめにこぎ着けた。タイトな時間の中で全市をくまなく回り、市域全体の景観構造をゾーン・軸・際に区分、重点整備地区について、まちづくりとデザインの誘導方向を文脈化する作業は、ハードな事だったが、それだけに北九州市への思いは他ならないものがある。

昨年2月、名古屋都市再開発研究会の視察で門司港レトロ地区を訪ね、その際、説明をして頂いた北九州市役所の都市計画課都市美デザイン担当職員の方が、面識はないものの、かつて当地区の景観形成計画に関わった私の事を承知して頂いていたことに、いささか驚きもし、かつ、うれしくもあった。

低層囲み型住宅・竹末団地を見る

午後からのヒアリングの前、午前中に再開発で有名なJR黒崎駅からタクシーを利用し、故内井昭蔵先生設計の低層・囲み型配置の竹末団地を訪ねた。10年ほど前には活気のあった黒崎だが、その後、再開発ビルキーテナントの「そごう」が撤退し、地元百貨店「井筒屋」が替わって営業を続けているも

の商店街の衰退は著しい、と地元で聞いた。たった10年ほどの間の事だが、隔世の感がある。

竹末有団地は、私たちが景観計画を担当した同じころの建設で、平成3年市営住宅竣工、4年老人住宅竣工、5年西部福祉センター竣工と一連の3ブロックで構成されている。市営住宅は3階建、一部4階、1フロア4戸の階段室型住棟を通路、緑地を囲むように緩やかな傾斜地に配置している。

市道で二分された住区をつなぐようにせせらぎが流れ、これを団地内の水辺緑地として取り込んでいる。団地外に流れるせせらぎは河川と見なされるが、管理条件の制約を超えて、団地内の修景要素に取り込んでしまう優れ技は、熟練した設計者と手練れの行政官の合作による錬金術と思わざるをえない。

出勤時間帯後の団地は人の気配を感じない程、物音一つしない静けさで、よそ者のビジターが入り込むのに違和感を感じなかった。たった一人、不自由そうに歩きながら住宅から出て行く老婦人に会ったが、見慣れない侵入者の私に、何の関心も警戒も示す様子は無く、それほどに親近感を覚えるヒューマンスケールの団地ではあったが、高齢者対応が売りで聞いたのに対して、車いす利用が難しそうな狭い共用通路、階段が主でバリアフリーには厳しそうな共用空間のしつらえが気にかかった。

12年前の担当者を探して

竹末団地視察後、元担当の方々訪ね、都市計画課を訪問。職員のお手を煩わせ、旧知5名の内、現地事務所に出ておられる1名の方を何とか確認。少々



竹末団地：緑地を囲むように緩やかな傾斜地に配置されている



住区をつなぐように流れるせせらぎ



隣接する老人住宅

気落ちしながら、その方にお電話、その結果2名は退職、内1名は相談員で残り、3名は他部署に異動とわかりほっとした。駆け足で3名を訪ね、懐かしくご挨拶を交わせたことは涙ものの幸運だった。

指定管理者先進都市・北九州市

旧古河鉱業若松ビル現地視察に先立ち、(財)地方自治研究機構の方と総務市民局市民部地域振興課を訪問、指定管理者適用の経緯、現状についてお聞きした。北九州市では指定管理者適用対象を600ほどあげ、200について実施、現在、当初指定の更新期を迎える第二ラウンドに入っている。指定管理者の多くは以前の管理組織との関係が強いが、最近では民間の関心が高く、応募が増える傾向にある。

後日、以前名古屋の勉強会でお話を伺った小倉城指定管理者は、当初の地元百貨店・井筒屋から初期はTMOに替わるようにお聞きした。

旧古河鉱業若松ビルを訪ねて

北九州市は小倉、八幡、門司、戸畑、若松の旧5市合併の都市であり、計画検討当時の市担当者のご意向は、合併の壁を越えて一つの北九州イメージを形成することだった。しかし、景観の目指すところは地域の個性を明確にすることと認識し、実際に歩いて感じた特徴に応じた地区のプランを提案し、審議会のご審議を経て、とりまとめを行った。

久々に旧古河鉱業若松ビルの前に立った景観の



旧古河鉱業若松ビル（現在）

印象が計画検討当時と大きく変わらず、当時描いたスケッチのように、海岸線の歩行者環境が整備され、幾分少なくなった近代建築群は一層際立っていた。

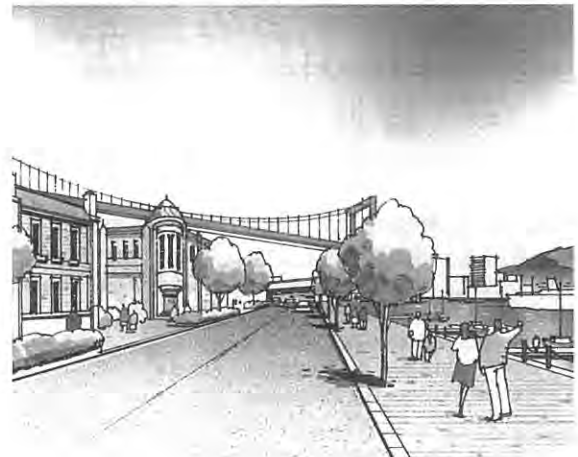
地元の結束した保存活動が支えた活用

旧古河鉱業若松ビル指定管理者は、平成7年からはじめた地元の保存活動団体を母体としている。

「若松南海岸通りの歴史と景観を考える会」山口久会長は「愛着の強かったJR若松駅（起終着駅）の撤去の反省から、当該ビル売却意向を聞いた商店街、町内会、婦人会、企業参加の活性化協議会など11団体が結集、全世帯の95%が署名に参加。その後北九州市が調査を実施し、これに地元まちづくりNPOやJCが協力。最終的には市が地域の観光・交流施設として位置づけ、処分意向を持つ所有者から買収、全世帯の90%が参加した寄付金を含めて保存・修復工事を実施。昨年9月から公開・活用がはじまり、1年間で貸館事業、月平均1300人、観光、月平均1400人の来場者がある」との事だった。

無言の建物の魅力が人を呼ぶ

企画・運営に携わる渡辺いずみさんは利用者との交流から「建物が人を呼ぶ」と強調する。近代建築を見るにつけ、現代建築にはない無言の魅力を感じさせられるのは、私だけでは無いだろう。



景観形成計画でのスケッチ



環境政策もラジカルな
合理主義の国オランダ
〜海外環境関連視察報告その1〜
大阪事務所／畑中 直樹

昨年の8月、ひょんなことから海外に環境関連の視察に行く機会に恵まれました。当初は、1992年リオの地球サミットの頃から環境都市として有名になったブラジルのクリチバにと誘われたのですが、約2週間の行程で組まれたプログラムは、欧州のオランダ、そして北米のアメリカを経由して南米のブラジルと、地球を東回りでまったく事情の異なる地域を一周半する体力勝負（機中3泊）の欲張りなものでした。

海面下、下流域、高密度・・・環境問題に関するオランダの背景

まず初めの視察地オランダは、人口約1,600万人、面積約42,000km²（日本の九州くらい）と小さな国です。

外務省のホームページを見ますと、「400年に及ぶ歴史的伝統的友好関係を維持、両国の皇室・王室関係は極めて親密」と記載されています。鎖国していた江戸時代も、長崎の出島経由で交易が続き、「コロッケ」「オテンバ（暴れる子馬）」「ドンタク（休み）」など多くの言葉（文化）が定着しているだけでなく、当時の世界との窓口として近代国家日本の源流として司馬遼太郎も訪れた関係の深い国です。

ある時、堤防からちょろちょろと漏水しかけていたのを少年が見つけ、その穴に自分の指を突っ込んで決壊を防いだといった逸話もたしかこの国だったような気がします。排水用の風車で有名なように、35kmにわたる大堤防を築き干拓で広げた国土の半分以上が海面下で、古くから水と闘ってきた国です。

社会的には、小国であることや水との闘いの歴史

などから合理主義、ラジカルで、ドラッグ合法や有名な「飾り窓」などもそういう社会的背景があるようです。

環境問題に関してもラジカルで、1900年代半ばにはヨーロッパでも農業汚染、いわゆる「沈黙の春」のようなことが起きていたようですが、農業が重要な産業であるオランダは1970年代以降自国内の対策とともに、ライン川上流のドイツ等とともにその流域管理に取り組み、これは後にEUの様々な環境委員会の原型になったとされています。

また、メキシコ湾流の恩恵で緯度のわりに温暖なヨーロッパは、地球温暖化の影響で海洋大循環が弱くなり寒冷化すると困るため地球温暖化問題に積極的ですが、オランダはこれに加え海面上昇の影響をもろに受けてしまうこともあり太陽光や風力といった自然エネルギーの導入などの取り組みも進み、国民1人当たりの二酸化炭素排出量は欧州で最低クラスです。

ちなみに、今現在、日本に輸入されている風力発電プラントはオランダ製が、オランダに輸入されている太陽光発電装置にも日本製が多いようで、これも何かの縁でしょうか。

さて、バックグラウンドについて少し長くなりましたが、このようにその地理的社会的条件から合理主義、そして環境問題にもラジカルなオランダでは、ハウステンボスやNHKなど日本各方面とのコーディネートで活躍されている後藤猛氏の案内で、環境学習施設を3カ所、そして社会学習(?)として夜のアムステルダムを視察しました。



川沿いに建つアーネム水の博物館



アーネム水の博物館：水に関する学習展示施設



オランダ野外民族博物館



デ・クライネ・アールデ：
様々なエコ技術が組みこまれたコア施設



デ・クライネ・アールデ：
エコロジカルフットプリント



10kmくらいまでは自転車移動
(自転車道総延長約450km！)

アーネム水の博物館 (Water museum)

アーネム水の博物館 (Water museum) は、水環境のマネジメント全般に関する一般から専門家に至る人を対象とした環境学習施設で、水車施設を活用して地下に増設する形で (延床約 2,000 m²) 世界各地の水利用に関する文化、オランダの水利用に関する学習展示施設、IT施設、そして子どもたち向けのウォーターラボなどがあり、グッズコーナー、レストランが併設されています。

設立はウォータースカップ (治水委員会) 主導で、国連のアナン事務総長やオランダ王室の皇太子なども縁があるようで、運営主体は日本でいうところの財団法人です。このウォータースカップは、水と闘ってきたオランダ独特の民主主義政治の最も古い形態の一つで、公共組織として政府とは別に存在し税もとり、上水道以外の水に関するほとんどの事業を担っています。

ちなみにアーネムは、オランダ東部ヘルダーラント州のドイツ国境に近いライン川沿いに位置する州都で、映画「遠すぎた橋」の舞台ともなった場所です。

オランダ野外民族博物館 (Nederlands Openlucht museum)

オランダ野外民族博物館は、同じくアーネム郊外の森の中約 44ha の敷地にある、工業化以前のオランダの生活文化を体験学習する施設で、様々な年代の農家、風車、工房などが移設、再現されています。ここでは、日系人ジョン・シライシ氏にインタビューしていただきながらオランダの農村文化に少し触れることができました。オランダでは大きな家は沈むから裕福な家は庭を立派にしたとか、木靴は湿った土地で作業するためのもので今でも使われるとか、様々な生活文化が低地である環境に由来しているようです。

デ・クライネ・アールデ (小さな地球) (De Kleine Aarde)

デ・クライネ・アールデ (小さな地球) は、オラ

ンダ南部 Boxtel に立地する「持続可能なライフスタイル」についての滞在型の環境学習施設です。ヨーロッパの環境学習施設の中でも古いもので、1972年4グループによる農家での有機栽培からスタートし、特に92年のリオの地球サミット以降注目され、エコセンター (Center of sustainable lifestyle) としてオランダの環境教育の中心的存在となっているものです。運営はNPOがしており、ローカルアジェンダやエコロジカルフットプリントに関するヨーロッパ内のネットワークにも参画し国連関係者も良く訪れているようです。

現在は2.5haの敷地に、コア施設、自然体験公園、有機モデル農園などが、さらに周辺にはその施設概念を反映したエコ住宅地が立地しています。コア施設は、コンポストトイレ、太陽光発電、冷蔵庫、採光設備、建材、屋上緑化等様々な技術、商品が組み込まれ展示されたいわゆるエコハウスです。ここでは、エコロジカルフットプリント、フードマイレージなど環境への負荷量や地産地消を題材にした学習展示などがなされ、レストランでは有機栽培の食材を体験できます。屋外には、各種コンポスト、モデル農園、比較学習用のほ場、生物に配慮した多孔質な庭、自転車交通体験施設などがあり持続可能なライフスタイルについて総合的に学習することができます。

今回視察した3つの環境学習施設は、「水」、「農村文化」、「持続可能なライフスタイル」といったテーマも運営形態もオランダの社会的環境的背景を各々強く反映したものでした。日本では、環境先進国としてよくドイツなどの例が紹介されますが、近代国家日本の源流でもあるオランダにも学ぶべきことは多いのではないのでしょうか？特に、前号で私どもの森岡がご紹介しました豊岡 (低地、生物多様性、環境と経済) などの都市では様々な面でその知恵を活かせるのではと感じました。

次の視察地アメリカ、ブラジル、そして3国比較は、次号にてご報告したいと思います。(つづく)



めざすは城内地区の活性化 「尼崎城内フォーラム」が開催されました

大阪事務所／岡本 壮平

去る11月6日(日)尼崎城内地区において『旧尼崎警察署24時間だけ解禁!』と銘打って「あまがさき城内フォーラム」が開催されました。尼崎のイメージアップを尼崎城の歴史と城内の資源を活かして取り組む「あまがさき市民まちづくり研究会」が主催者となり、尼崎南部再生研究室や城内地区まちづくり懇話会、尼崎市立地域研究史料館など諸団体の協力の下、多彩なプログラムが展開されました。

尼崎城内地区において近代建築を保全活用して“本物の魅力”を創造・発信していこうとしていることは、本誌第132号でご報告しましたが、今回はその具体的な一歩となる取り組みについてご紹介致します。

市民まちづくりの一環として

フォーラムの舞台となったの

は旧尼崎警察署です。この建物は、大正15年に建築された鉄筋コンクリート造の警察署で、セセッション風と呼ばれる意匠が特徴の端正な外観の近代建築です。

警察署の役割を終え児童館として使用されていましたが、阪神・淡路大震災以降、使用が休止されており、雨漏りなどのため傷みが進む中、市民の間からもその保存を危ぶむ声も聞かれています。

尼崎市が補修に乗り出す一方、市民の側からも「保存に向けた取り組みを興そう」という気運が生まれ、「保存するためにはまず建物の価値を知ってもらおう、工夫次第で使える建物であることを示そう」というねらいで、今回のフォーラムが企画されました。

正面玄関の扉が開く

永らく封印されていた正面玄関の扉(大戸)が開けられ、旧尼崎警察署は10年以上の眠りから目覚めました。玄関正面は市民により色鮮やかなフラワー

ポッドで飾られ、美しい奥行きのある外観には彷彿とさせられました。

奥深い尼崎を体験できる施設見学、剣道場での開会挨拶のあとは地域研究史料館の職員の方の解説付きで施設見学です。旧尼崎警察署の見所はなんとといっても半地下にある薄暗い留置場や取調室です。なんとも言えない不気味で楽しい(!?)体験となりました。合わせて、隣接する旧城内中学校も見学しました。ここでは旧女学校時代を思い起こさせる美しく落ち着いた中庭が印象的でした。

昔懐かしい展示の数々

会場では柔道場を転用した即席の展示ギャラリーが人気でした。昔の城内の写真や地図、城内に由縁のある国学者契沖に関する資料などは懐かしく感じ、思い出話に花が咲きました。またまちづくり懇話会が示す城内の未来像にふれて、まるで過去から未来を見通すようでした。

旧尼崎警察署 24時間だけ解禁!

城内清掃イベント
平成17年11月5日(土)
10:00~14:00

あまがさき城内フォーラム
平成17年11月6日(日)
10:00~15:00

お世直しになったヒトも
そうでないヒトもどうぞ

■フォーラムプログラム(11/6)
10:00~ 開会あいさつ
10:30~ 南阪見学会(旧尼崎警察署・旧城内中学校)
お昼ごはん 懐かしの音楽会&カツ丼昼食会
(アインシュタイン・ハウス・ジャズ・オーケストラ・etc.)
13:30~ 城内のお話を語ろう
その昔、城内地区の懐かしい写真、契沖関連資料、城内
まちづくり懇話会パネルなどの展示も。
費用 100円(資料代、保険料込み)
昼食をご入用の方はカツ丼を注文します。
別途実費をいただきます。
【お問い合わせ先】
あまがさき市民まちづくり研究会 幹事:馬場
電話 090-8820-6353

旧尼崎署はこちら、
城内児童館があった
建物です。

アクセス

主催:あまがさき市民まちづくり研究会
後援:尼崎市、尼崎市教育委員会
協力:尼崎南部再生研究室
城内地区まちづくり懇話会
尼崎市立地域研究史料館



案内チラシ(尼崎南部再生研究室:若狭氏作成)

姿を現した正面玄関

ライブ会場に早変わり

見学を終えて小腹が空いたところで昼食です。警察といえは…そう「カツ丼」です。カツ丼をほおぱりつつ、にわか刑事ドラマがあちらこちらで展開されます。続いてフォーラム会場はライブ会場に早変わり。市内在住の岡部光行さんの繊細なアイリッシュハーブ、アルパックバンドの迫力あるジャズ、画家でもある高木清さんのソウルフルなフォークギターが次々と演奏されました。

城内を語る集い

最後に参加者が輪になり、城内について語り合いました。旧城内中学校に通ったこと、国道43号建設前の本町商店街の賑わい、あるいは戦争体験など城内フォーラムは大成功のうちに終了しました。正面玄関の扉は再び大戸で閉められあたりは静けさを取り戻しました。しかし、城内まちづくりが終わったわけではありません。市民主導でこうしたイベン



写真上：おっかなびっくりの旧留置場
写真下：カツ丼をいただきながら、
白井市長と一緒に

トが実現できたことは非常に大きな自信と実績になりました。折しも城内まちづくり懇話会では『懐かしさに触れ 地域を学び 新たな活動が生まれるまち城内』を目指したまちづくりを構想しています。市民、行政、地域が協力して、近代建築はじめ地域資源を活かしたまちづくりを展開し、尼崎の新たな宝物（自慢）に育てていくことが期待されます。

文化財となった戦前長屋の体験研修

大阪事務所／馬場 正哲

大阪郊外に住まうまち

本誌第118号（平成15年）で、当時新入所員であった和田祐介が府下の近代建築の全数を自転車で調査した折りの気づきは、「それは大阪中心部を取り囲むように、当時の建物が残る住宅地が点在し、それらが非常に豊かな町並みを形成していることだ。」「市内では阿倍野区や住吉区、大阪北部では豊中や箕面、吹田、東部では東大阪や藤井寺、南部では堺や高石、泉大津などがあげられる。」「各建物は近頃の建材では表現できない素材感による深みを備え、庭の植栽は林のように成長している。これらの住宅が群として集積することにより、地区全体がずっしりとした風格を醸し出す。」「自分が新興住宅街に居住していることもあり、これらの風景は郊外

という言葉を再発見したような気持ちにさせ、風景の奥行きに魅力を感じた。」だった。

この郊外住宅の中で、阿倍野区や住吉区に残される戦前「長屋」が都市居住の伝統の郊外化した歴史性と住宅文化の価値が評価されながら、老朽化し取り壊される運命が惜しまれて久しい。

長屋とは、複数の住戸が水平方向に連なり、壁を共有または一棟の建物を水平方向に区分し、それぞれ独立した住戸としたもので、それぞれの住戸に玄関が付いている。長屋というと落語などで貧乏長屋のイメージが染み付いているが、戦前の大阪郊外の長屋は戸建てに匹敵する堂々たる住まいといえる。

明治以降も都市住居としては長屋の借家が一般的であった。都市住居の郊外化も賃貸住宅は長屋で供給され、郊外の特徴にモダニズムが加わり独特の居住地文化をつくりだしたといえる。

郊外戦前長屋が登録文化財に

昨年、大阪府の文化財担当の林義久氏より「長屋」を登録文化財に指定したことを伺った。しかも、府の職員だった寺西興一さんの長屋と聞いた。

寺西さんは、府の再開発担当をされていた頃、(社)再開発コーディネーター協会の交流・勉強会「関西Qの会」の立ち上げに、「再開発の専門家が集まり学ぶことは大事なことだ。是非続けて頑張るように」「参加者が一人に



きんきょう

なっても続けよ」と叱咤激励下さった恩人である。お陰で関西Qの会は途切れることなく今日211回を数えることとなっている。

長屋活用の体験研修

この阿倍野区阪南町にある、全国で初めて登録文化財に登録された四軒長屋の再生を、体験研修?しようと、市街地整備チームの面々と出掛けた。

研修場所は現代長屋活用の好事例、この四軒長屋の一軒で営業中の「昆(COM)」。亭主の伊藤史晃さんは、昭和57年生まれの若者で「日本の古きよき時代-昭和初期の長屋建築と洋のエッセンスが加わりモダンでエキゾチックな空間と不思議な時間の流れの中で料理を味わって頂きたい」とのこと。

同じような戦前和風住宅で育ったものとしては、懐かしさと飲食空間との違和感が同居して、奇妙なノスタルジックな時間を過ごすこととなった。特に、窓や格子、欄間、棚など和風木造住宅の細部に記憶が宿る。思い出せば、光や風や音など外との関係が豊かに取り込まれた住まいだったと思ひ出され、なんとも昭和・オールエイズの生き証人となりつつあることを実感。



四軒長屋の全景

ベランダから

体験研修が一通り仕上がり、外気に触れようと窓を開けると、懐かしい「ベランダ」がある。腰を掛けて下の道を見おろすと同時に、記憶する人の話し声が耳に入ってきた。なんと寺西さんが亭主と話をされている。上から失礼とは思ひながら「寺西さん!ご無沙汰してます。」と声をかけてしまった。意外な方向からの声に見上げて「お!なんや来てるのか。後で家に来いや。」昔のベランダからのご近所との気安いコミュニティを思い出させるシーンが再現された。

近代遺産の継承と価値再生

この長屋の向かい、和洋折衷の大きなおうちにお住まいの長屋オーナーである寺西さん宅に伺い、当時の青写真を前に、登録文化財誕生秘話を伺った。

大正末期から始まった阪南土地区画整理事業によって整備されたまちに、長屋建設が進められ、この四軒長屋も昭和8年に寺西さんのお祖父様が自宅前に建てられた。当時すでにガス風呂を完備していたとのこと。

しかし、近年老朽化が目立ち、周囲の長屋が相次いで姿を消す中、マンションへの建替えを模



なつかしい2階ベランダ

索されておられた。幾つかのハウスメーカーが名乗りをあげたその時、建築家や研究者が寺西さんの長屋を見に来られ、是非残してほしいとの熱心な要望があり、耐震補強の可能性や借家経営のことなど思案された。そんな中、「登録文化財を考へては」との勧めに動かされ、府の文化財保護課に相談され、全国初めての長屋登録文化財指定に踏み切られた。

かくてマンションプランの猛攻に耐え、修復され全国初の登録文化財の誕生にいたったとのことだが、マンションへの建替えと修復による借家での活用とを事業収支を検討され、修復による活用の方が銀行借入れなしで有利な試算が成り立ったとのこと。また、是非ここで営業させて欲しいとの話にも恵まれ、店舗2軒と娘さんの住居に、70年の時を経て美しく四軒長屋がよみがえり、近代遺産の保存と価値再生が実現したとのこと。

私たちの連綿と続く歴史と大切にしてきた自然や人間関係を昭和初期に具現化したこの長屋は、これからの私たちにとっても大事な遺産として活かし継承していくことがこの研修で問われた課題となった。



青写真を前に

うまいもの通信



旅館と農園の「コラボで卵」
～新たな「能登の味覚」が登場！～

京都事務所／高野 隆嗣

【出会いはある日突然に】

私どもアルパックでは、様々な地域の色々なご職業をお持ちの方々と、仕事を通じてお知り合いになることが喜びです。今年で所暦15年を迎える私も、北は秋田から西は鳥取まで沢山の方々と出会いがありました。平成10年から時折お邪魔している石川県七尾市で、農業を営む浦辺さんも、仕事を通じて知己を得た方の一人。丹精込めて作られたこしひかりを毎月、分けていただき、我が家の2人の息子も毎日、おいしく戴いています。

今月も産地直送の「浦辺米」が大きなダンボールで届きましたが、何やら一回り小さな箱が内包されていました。小箱を開けてびっくり！！乱暴に開封された箱の中からは、光沢ある赤玉の卵がびっしり！よくぞ割れずに京都・桃山の我が家まで届いてくれました。

【3百羽の鶏がごちそう食べて元気に駆ける】

後日ご本人に電話でお礼を述べるとともに、事情を伺い、又びっくり。第二種兼業農家で5町歩（約500ha）の水田を営む氏が、今春から何と2百羽



雪の中でも元気な「ボリスブラウン」と赤玉

のボリスブラウンと1百羽の星野ブラックワンの養鶏に着手されたとか。毎日、運動場付の平飼い鶏舎で3百羽のにわとりが走り回り、赤玉を産んでいるのだそうです。

とりの餌の出処を聞いて三度びっくり。能登・和倉温泉で創業1百年を迎える旅館「加賀屋」さんにおいて、日々排出される調理屑や食べ残しを飼料化して与えているとのこと。生産された卵は、再び加賀屋のお膳に提供されるとか。これぞ地産地消なり。

【平成18年度の食品リサイクル法実効を睨んで】

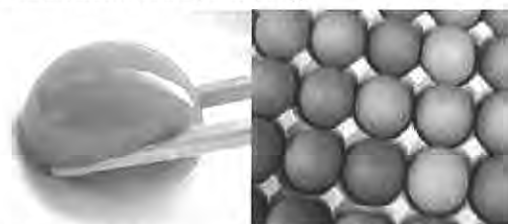
この発端は食品リサイクル法。年間1百トン以上の食品廃棄物が出される事業所には、今年4月までに20%の再生利用が義務付けられます。加賀屋で排出されるごみの約4割が「生ごみ」とのこと（注：加賀屋資料）。ごみの減量化と食品リサイクルネットワーク形成を目指し、（財）石川県産業創出支援機構の支援も得て、今回の養鶏・鶏卵生産の実証実験に取り組みされました。平成18年度は野菜生産にも挑戦するそうです（注：七尾市農林課のお話）。

【お味もよろしいようで】

届きたての赤玉は小ぶりで固め。テーブルのかどにあててヒビを入れ、お椀に落としてから口にくむ。舌で弾くと、弾力感ある黄身から溢れ、何とも濃厚な味わいが広がります。気になる売価は一個30円。お土産に、または産地直買にてどうぞ。

能登の新たな味覚、浦辺農園の卵を、炊き立てのこしひかりにかけて食べ、今年も一年頑張ろっと。浦辺農園へのお問合せはメールにて。

e-mail:kositokutou@yahoo.co.jp

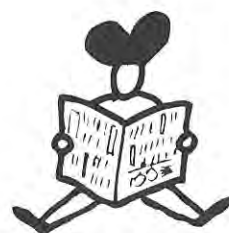


MEDIA WATCH

「プレゼンテーションの極意」

著者／川崎 和男

出版／ソフトバンククリエイティブ



紹介者／大阪事務所 坂井 信行

プレゼン＝パワポ？

プレゼンテーション（あるいはプレゼン）と聞いてパワーポイント（あるいはパワポ）を思い浮かべる人は多いのではないのでしょうか。読者の中にも「パワポ」を「プレゼン」の代名詞的に使っているという方がおられるかもしれません。ちなみにパワーポイントというのはマイクロソフト社がつくったプレゼンテーションのためのパソコン用ソフトです。いまやワープロといえば特に断らない限りワードをさすように、プレゼンツールといえばパワポをさすというのが現状です。それだけでもちょっと異常な状況だと思うのですが、まあ、ここではそれには目をつぶることにしましょう。

プレゼンテーションは「オリジナリティ」

本書では川崎和男氏がデザイナーとして、学者として、教育者として、グッドデザイン賞の審査員として、あらゆる企業や学会でのプレゼンテーションを見聞きした経験からその本質が語られています。ただしプレゼンテーションのノウハウ本ではありません。

プレゼンテーションというのは自分が考えたアイデアや提案を他人に伝えるということです。いくらいい考えが浮かんでも人にうまく伝えることができなければ現実のものにはなりません。プレゼンテーションは自己実現でもあるのです。

自己実現に直結するプレゼンテーションでパワーポイントというツールにとらわれることがいかに問題であるのか。確かにそれほど苦勞しなくても見た目には立派な資料ができて上がるかもしれません。ただし、裏を返せば誰もが容易にこの程度のものならできてしまうことでもあるのです。プレゼンテーションでは人とは違うことをやってみようという気概こそが重要だということです。

プレゼンテーションは「こだわり」

米アップルのCEO スティーブ・ジョブズのプレ

ゼンテーションに魅了される人は世界中にたくさんいます。黒いシャツにジーンズというおなじみの出で立ちで聴衆の前に現れ、前半は製品の売り上げやマイナーアップデートを淡々と伝えます。そしてそろそろ終わりかという頃に“One More Thing”「実はもう一つある」と。それからおもむろにとっておきの目玉製品を取り出すのです。ある意味でわがままな彼は自分が世に送り出す製品がいとおいしくて仕方がないのでしょうか。それは計算しつくされ演出されたショーでもあります。

プレゼンテーションで重要なのは、自分のアイデアにいかにか愛着を持っているかということ、そして著者の経験ではプレゼンテーションのうまい人というのは普段から「こだわり」を持つ人が多いということです。

自己表現としてのプレゼンテーション

私自身にとってプレゼンテーションの機会といえは、コンペやプロポーザルなどプロジェクトを獲得する時、そしてプロジェクトの推進段階です。通常は時間がない中でコンテンツ（アイデア）をつくることに手一杯で、プレゼンテーションの準備にまでなかなか時間を割くことができません。しかし、本当はコンテンツを考える段階からプレゼンテーションは始まっているのです。なぜならコンテンツのないプレゼンテーションはあり得ないし、逆に、何らかのプレゼンテーションによって表現されない限りそのコンテンツは存在すらしないことになるのですから。

本書を読めば、パワーポイントの呪縛から逃れてオリジナリティあふれるプレゼンテーションがしたいと思う方にとっては一筋の光が見えてくるに違いありません。あるいは、ウインドウズやパワーポイントの絶大なシェアをクールに捉えるアップルファンにとってはある種の爽快感が得られるかもしれません。

MEDIA WATCH

映画

「カーテンコール」、
「ALWAYS三丁目の夕日」
「らくだ銀座」

近年、特にこの秋から冬にかけて、「昭和」を舞台にした映画が、数本上映されています。それぞれ「昭和」を主な舞台としながら、「家族の絆」や「未来への希望」、「街の元気」などテーマは違いますが、人々が笑い、泣き、怒りながら日々を一生懸命に暮らしていく姿が描かれています。カーテンコールとALWAYSの舞台は昭和30年代であり、私も含めた40～50才代の方々には子どもの頃の記憶と重なるため、「おじさんをターゲットとしたノスタルジーな映画」的に宣伝されている部分もあります。しかし、映像を見るとその奥には、家族愛や差別、斜陽産業（映画、氷売りなど）で時代に取り残された人々の懸命な暮らし等、人間の本質を問うテーマが隠されているのがわかります。

例えば、カーテンコールでは、映画と映画の幕引きに形態模写や歌を歌う芸人とその家族が、テレビが家庭に入りこんできて、映画が斜陽産業となる時代の大きな転換期の波にさらされ職を失いバラバラになっていく家族の姿などが描かれています。

もちろん、エンターテインメント性も加味されており、例えば、ALWAYSでは、テレビが家にやってきたのを町じゅうの人々を集めてプロレスを見る場面など、多少誇張して演出されていましたが、事実、私の記憶でも、我が家にテレビが来る日を心待ちにし、前に垂れ幕をかけた「テレビ様」を、近所



紹介者／大阪事務所 中塚 一

の友達（悪ガキ）と一緒に迎えしたのを覚えています。

昭和30年代という時代背景が単なるノスタルジーではなく、どこか心を惹かれるのは、「わが街」の中心に映画館や商店街等があり、その周りに様々な年齢層の街の人々が常にワイワイガヤガヤと集まっていたからではないでしょうか。

その後、テレビからビデオ、テレビゲーム、パソコン、インターネットが家に入り込み、現代、わざわざ人々が集まりワイワイガヤガヤする場所は、郊外のショッピングセンターだけになってしまったのか？街なか再生のカギがここにあると考えています。

追伸：地域密着型で作成された林弘樹監督の「らくだ銀座」は、映画館ではなく、現在、全国各地のイベントやお祭りなどを舞台に巡回型で上映されています。関西ではまだ上映されておりませんので、是非、一緒に上映を企画しませんか。ご一報下さい。

（詳細は、<http://www.rakuda-ginza.com/>）



歴史的な町並みが残る「坂本」を訪ねて

名古屋事務所／木下 博貴

昨年の入社以来、名古屋市の白壁地区を拠点に近代建築とその町並みを保全・継承しようと活動する白壁アカデミアのお世話をさせていただいています。主な活動としては、名古屋市近郊に残る歴史とこれを支える技を知ってもらおうと、専門家による現地講義の開講や、訪れたまちを地元の方から案内していただく現地交流会などがあります。昨年、この現地交流会がきっかけで滋賀県大津市にある坂本を訪れることとなりました。

私の出身は京都市の修学院で、幼少の頃から比叡山を見て育ちました。当時は、山の向こうにどんな“まち”があるのかなど気にもしていませんでしたが、まさに比叡山を隔てて反対側が坂本のまちであったのです。また、以前、京都事務所が坂本地区の伝統的建造物群保存地区保全計画策定のお手伝いをさせていただいたこともあり、なんとも不思議な気持ちとともに親近感が沸いてきました。

さて、訪れた坂本のまちは、歩道が整備され、沿道には桜が植えられ整った景色で、落ち着いた

あるまちに感じました。しかし、道の整備と植栽だけが、その印象を与えたわけではありません。坂本が近世以降、比叡山延暦寺と密接に関わりながら発展したまちであることが大きく影響しているといえます。一つは、里坊の存在です。里坊とは比叡山で修行を積んだ僧侶たちが天台座主の許しを得て住み込む隠居坊のことで、日吉参道と呼ばれるメイン通りには左右に里坊が並んでいます。心を落ち着けて景色を見ることにより悟りを開くという仏教の教えから、寺内に庭園をつくる里坊も多く、その精神は、寺内だけではなく通りにまでにじみ出ている感じがしました。

もう一つは、かつてから比叡山の土木営繕的な御用を勤めていた「穴太衆」による技術です。坂本には、里坊だけでなく寺社や民家に穴太積みと呼ばれる石積が多く使われています。穴太積みで整えられた町並みは、重厚感とともに歴史の深さを感じることができました。

すぐれた歴史的風致が残る坂本に、みなさんも是非足を運んで頂きたいと思います。



穴太衆積み



里坊

アルパック(株)地域計画建築研究所

<http://www.arpak.co.jp> E-mail info@arpak.co.jp

本 社

京都事務所 〒 600-8007 京都市下京区四條通り高倉西入立売西町 82

大阪事務所 〒 540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F

名古屋事務所 〒 460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 8F

東京事務所 〒 186-0001 東京都国立市北 1-1-17 田畑ビル 3F

九州事務所 (株)よかネット 〒 810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478

TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760

TEL(042)501-2531 FAX(042)501-3024 分室 / TEL(03)3226-9130

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128